

國學院大學學術情報リポジトリ

現代語の逆接の「ものの」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 「ものの」, 〈不足感〉, 〈話し手から見ての好ましさ〉, 〈前後件どちらかに不足感〉, 〈前後件どちらにも不足感が感じられない「ものの」の文〉, 「こそ」 キーワード (En): 作成者: 菊地, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001709

現代語の逆接の「ものの」

菊地 康人

キーワード：「ものの」、〈不足感〉、〈話し手から見ての好ましき〉、〈前後件どちらかに不足感〉、〈前後件どちらにも不足感が感じられない「ものの」の文〉、「こそ」

はじめに

現代語のいわゆる逆接の接続助詞（的な語句）には、「が」「けれども」「けど」「ながら」「といっても」「のに」「にもかかわらず」「ものの」などがあるが、本稿はこのうち「ものの」について考察する¹。これらのうち、「が」「けれども」「けど」は、前後件が何らかの意味で反対の関係にあれば使えるといつてよいほどかなり広く使えるのに対し、他の諸語は、逆接の中でもある程度限られた場合に使うという制約／特徴をそれぞれ持っており、「ものの」もそうであるが、その制約／特徴が最も見てとりにくいのが「ものの」ではないかと思われる。日本語教育では中上級の学習項目であるが、学習者が「逆接」というだけの知識で「ものの」を使って文を作ると、不自然な文になりがちで、それに接した教授者もなぜ不自然なのかを説明しきれない、ということを、筆者自身、日本語教育に従事していたときにたびたび経験してきた。現代語「ものの」を扱った先行研究は思いのほか多いが、日本語学習者への説明力という点からは、なお隔靴搔痒の感がある²。筆者もこの語について多年考えてきたが、ようやく最近に及んで「ものの」にある程度迫れたかと思うので、本稿ではそれを提示してみたい³。

以下、§ 1 ではまず、「ものの」について気付くいくつかの特徴をあげる。その上で、§ 2 では、「ものの」の文が自然な文になる場合を、大きく 3 つ

の場合に分けて見る。§ 3では、逆接の文ではあるが、「ものの」を使うと不自然になる場合をいくつかあげ、それがなぜ不自然なのかを、§ 2で行った分析に基づいて説明し、その分析の妥当性を裏付ける。最後に「付」として、「スタートこそ順調だったものの、最後はさんざんだった。」のように使われ、「ものの」と相性がよいと思われる「こそ」に簡単に触れる。

§ 1 「ものの」のいくつかの特徴

初めに、「ものの」について気付くいくつかの特徴を見ておこう。

1) 後件は叙述文であること

「ものの」の後件には、叙述文は来るが、命令・意志などはなじまない。

例えば、

(1) ?? むだだとわかっているものの、挑戦しなさい。(中里1997:166、中里の判断は「?」)

(2) ?? 漢字は苦手なものの、がんばって勉強します。

(3) ?? 賞味期限を1日過ぎてしまったものの、食べてしまいましょう。

などは(日本語学習者の産出には時々見られる)、違和感がある⁴。

2) ふさわしいスタイルとともに使われるのが落ち着くこと

(4) ? がんばったものの、だめだった。

が、誤りとはいえないまでも、やや不自然に感じられるのは、「がんばった」「だめ」のような言葉との相性の問題であろう。

(5) 果敢に攻撃したものの、得点できなかった。

のような文ならふさわしい感じがする。いわば、述べ方としての〈オフィシャル性〉と相性がいいとでもいえようか。

3) 後件の内容のほうを重要なものとして提示すること

日本語は、文構造として(等位接続でない場合は)後件が主節であり、意味的にも後件が主だと見られる場合が多い。そうではあっても、それは、「後

件の内容に、前件の内容以上の価値がある」という価値判断を話し手がしている、ということでは必ずしもない。例えば、

(6) 東京ではエスカレータの左側に乗るのが暗黙のルールだが、大阪ではエスカレータの右側に乗るのが暗黙のルールである。

という場合、「が」は逆接の接続助詞で、前件が従属節、後件が主節ではあるが、後件の内容のほうが前件の内容よりも重要である、という価値判断を話し手がしているわけではないだろう。

ところが、「ものの」の場合は、後件の内容のほうを重要なものとして提示する、という話し手の価値判断が感じられるように思う。

(7) a スタートは順調だったが、途中から崩れ、最後はさんざんだった。

b スタートは順調だったものの、途中から崩れ、最後はさんざんだった。の2文は、接続助詞が「が」か「ものの」かという違いがあるだけで、当該の文だけを見ている限りは、ほぼ同じように映る。だが、この後に、

(8) まず、順調だった前半を振り返っておくと、予告編の宣伝効果と、大物俳優を惜しげもなく投入した話題性とで、めったにないほどの高い視聴率を得たのだった。だが、……

のような内容を付け加えるとしたら、どうだろう。(7) aの後への(8)の付け加えは自然だが、(7) bの後に(8)を付け加えるのは、違和感がある。これは、(7) bのように「ものの」を使った以上、その時点で話し手の関心は後件のほうに絞られていて、前件の内容を振り返るのはなじまない、ということなのだと思われる。「ものの」には、(いつもとまでは言えないが)しばしば、このように前件を「封印」する気持ちの使い方がある。

前後件をただ並置している(6)では「ものの」はなじまない。

4) 実はニュートラルな述べ方ではない面があること

2)で「述べ方としての〈オフィシャル性〉と相性がいい」ことに触れたが、そうはいつでも、実はニュートラルな述べ方ではない面が感じられる。2つの例で見よう。

(9) A君は来たものの、B君は来なかった。

普通に事実を叙述するとき（例えば「出欠が決まっていなかった人が、A君とB君の2人いた。当日、その2人の出欠はどうだったかという、……」）というように、いわば粛々と一特段の気持ちをこめずに一事実を叙述する場合の文としては、実はこの文はあまりなじまないように思われる。

(9)のように述べるとすれば、わかりやすい場合としては、「その場に出席することが望ましい(出席者は多いほど望ましい)」という前提があって「A君はそれを満たしてくれた(話し手として満足のいく行動であった)が、B君はそうではなかった」という場合である。稀に、逆に「来ないほうが望ましい」という前提があって「A君はそれに反する行動をとった(話し手として評価できない行動であった)が、B君はそうではなかった」という場合も、ありうるかと思う(後者でも使うかどうかは個人差があるかと思う)。いずれにせよ、前件と後件に対する〈話し手から見ての好ましき(評価、満足度)〉が(暗に)問題にされていて、それが前件と後件で反対であるという場合に、この文は(「ものの」は)使われるのだと見られる。

(10) 一審は有罪だったものの、二審は無罪だった。

これも、事実をニュートラルに叙述している場合の述べ方ではないように感じられ、おそらく新聞報道の書き方ではこうは述べないのではないかな。

(10)のように述べるとすれば、無罪を勝ち取りたいと思っていた被告や弁護人の立場からの述べ方であろう。稀に、逆の立場(有罪判決を得たいと思っていた検察側の立場)からこのように述べることも、ありえなくはないかもしれない。いずれにせよ、前件と後件に対する〈話し手から見ての好ましき〉の高低が(暗に)問題にされており、それが前件と後件で反対であるという場合の表現であって、決してニュートラルな叙述ではないように思われる。むしろ、前者の場合なら「一審は有罪だったものの、二審は無罪を勝ち取った。」、あるいは後者の場合なら「一審は有罪判決を得たものの、二審は逆転無罪を食らってしまった。」とでも述べるほうが、「ものの」の表現性になじむぐらいではないかと思う。

〈オフィシャル性〉を感じさせるので、〈ニュートラル性〉もあるかに感じがちだが、実は〈話し手から見ての好ましき〉の高低に基づく、いわば〈え

せニュートラル〉な述べ方という面があるのではないかと思われる⁵。

以上、「ものの」について気付いたいくつかの特徴をあげてみた。

§ 2 「ものの」の文が自然な文になる場合

以下では、「ものの」の文が自然な文になる場合を具体的に見ていく。

まず、「ものの」は、多くは〈前件の事態から後件の事態へのつながりが順調／順当なものではないこと〉(仮に〈非順当性〉と呼ぶ)や、〈前後件の対照〉を述べる場合に使われることをおさえておこう⁶。

(11) 大物俳優を大勢起用したものの、視聴率はさんざんだった。

(12) この店の料理は高いものの、味は大したことない。

(13) 能力は高いものの、人望は今一つだ。

(11) (12) は前者の例である。(11) の前件は行為で、前件から後件への展開が順調なものではなかったこと、(12) は前後件とも状態で、前後件の相関が順当なものではないことを、「ものの」が示している⁷。(13) は、「能力が高ければ人望もあるのが普通だ」という了解は必ずしもないから、〈非順当性〉の例とはいえないが、〈前後件の対照〉を「ものの」で述べた例である。「ものの」は、(これ以外の用法もあるが) このように〈非順当性〉や〈対照〉を表わす場合によく使われる。

この点をおさえた上で、さらに注目してよいと思われるのは、上記3文いずれも、後件で、ある種の〈不足感〉が表されていることである。一方、次のように、前件に〈不足感〉が表れる場合もある。

(14) 耳はやや遠いものの、それ以外は全く不自由がない。

「ものの」が自然な文になる場合の多くは、このように、前件か後件かのどちらかに、何らかの〈不足感〉(=「不十分／不充足／不満足／不(未)達成」感など)がある場合のように思われる。

以下では、まず、これに該当する例を、1〈後件に不足感がある場合〉と、2〈前件に不足感(的なもの)がある場合〉とに分けて見ていく。もっとも、〈前件・後件のどちらにも不足感が感じられない「ものの」の文〉もあるので、それらについては、追って3として見る。

本節 § 2 では、「ものの」の文が自然な文になる場合を、大きく、この 1・2・3 に分けて見ていき、最後に 4 で、全体の簡単なまとめを試みる。

1. 後件に〈不足感〉がある場合

「ものの」の文が自然な文になる 1 つの場合は、前件が示す（または含意する）方向とは逆向きの〈不足感〉を後件が示す場合である。これにもいろいろな場合があるが、以下のように分けて見ていこう。⁸

1-1. 前件から予期された順調な展開に後件がなかった〈不足感〉

前件：ある方向（よい方向）に進みそうだと予期されるような事態（見込み、エフォート等）。

後件：その後の、その通りでない展開（その逆向き、あるいは、よい方向への動きが見られない）。その意味での〈不足感〉が伴う。

時間的に、前件が先、後件が後である。

(15) スタートは順調だったものの、途中から崩れ、最後はさんざんだった。

(= (7) b)

(16) 大物俳優を大勢起用したものの、視聴率はさんざんだった。(= (11))

(17) 医者に指示された薬をしばらく飲んだものの、効果はなかった。

(18) やってはみたものの、私には向いていないことがわかった。

(19) 大きなプロジェクトを任されたものの、成功の展望がない。

(20) 買ったものの、ほとんど役に立っていない。

(21) うちを出て来たものの、別にどこと行って行く当てもない。(倉持 1971 : 855、田辺 2001 : 例 9)

(22) 頭ではわかっているものの、すぐ行動に移せない。

(23) 一度はつかまえたものの、隙をつかれて逃げられてしまった。

(24) やっと日本に着いたものの、右も左もわからなかった。(日本語教科書の例文、中里 1997 : 165)

先行研究には、「ものの」の後件について、注 7 にあげたように、「それ（前件）から予測される順当な帰結とは反する、あるいは、それとは相容れない

事柄が存在・成立する」(倉持1971:855)といった記述が見られる。誤った記述ではないが、上の諸例はさらに

「前件は、ある方向(よい方向)に進みそうだという予期をもたせるものであったが、後件はその後の展開がその通りにならず、何らかの意味での〈不足感〉(的なもの)がある」

とまで書き添えたいような例である。先行研究にそこまでの記述がないのは、「ものの」には後で見るように他の用法もあるためだろうが、1つのタイプとしては、この「後件に〈不足感〉あり」を指摘してよいと思われる。

1-1'. 前件から期待される順当な相関関係が後件で不成立の〈不足感〉

「前件を前提とすれば、後件と反対のことが順当なのだが」というケースである。上記1-1の「前件から期待される展開とは逆の展開」に近いが、前後件とも状態の場合なので「展開」とはやや言い難く、「一般的に成り立つと期待される順当な相関関係が成り立っていない」と述べるほうがよいケースである。この意味で、後件に〈不足感〉あるいは〈不順感〉がある。

(25) この店の料理は高いものの、味は大したことない。(= (12))

(26) 体裁のいい肩書だけはもらっているものの、権限はほとんどない。

(27) 立秋とはいうものの、まだ残暑がきびしい。

1-2. 〈肯定感〉より〈不足感〉の程度が大(同じディメンションで)

前件: ある程度達成された(または、少しだけいい)面

後件: だが、前件は満足できることではなく、全体としては(あるいは目を向けるべきこととして)〈不足感/ネガティブ感〉がある

1-1のように「時間の順に起こる次の展開が予想外で〈不足感〉がある」というケースではなく、同じディメンションでの程度の対比である。⁹「前件: プラス(小)、後件: マイナス(大)」といってもよい。

(28) 香港でのSARSの流行は少しおさまったものの、まだ安心とはいえません。(朝日こども新聞 2003.5.15、田辺2005: 例8)

(29) ダイヤはほぼ平常通りに回復したものの、混雑は依然として続いてい

る。(佐竹1984：例6)

(30) 話しかければ答えはするものの、自分から進んで話そうとはしない。

(倉持1971：855)

(31) 耳だけはよく聴こえるものの、(加齢で) 全身あちらこちら不自由だ。

(32) いまは小康状態を保っているものの、樂觀はできない。

(33) あの二人は、殴り合いにはならないものの、時々ひどい罵り合いをする。

(34) クビにはならなかったものの、左遷された。

(35) 通過はしたものの、与党内からさえ反対票が出た。

(34) (35) は、事柄の軽重からは前件のほうが大きいことであっても、話し手としては後件のほうが述べたいことだというケースである。

1-2'. 〈肯定感〉より〈不足感〉の程度が大(別の次元で)

1-2 は、前後件が「同じ次元での程度」を問題にしているケースだが、1-2' は、前後件が別次元のことで、「前件：プラス(小)、後件：マイナス(大)」というようなケースである。後件のほうを重く見ている。

(36) 能力は高いものの、人望は今一つだ。(=(13))

(37) このあたりは、緑が豊かで自然には恵まれているものの、交通は不便だ。(佐竹1984：例5〈=後出(77)〉の前後件を逆にした文)

(38) 志は高いものの、金がない。

(39) 青汁は体にいいというものの、おいしくない。

(40) 彼は感心なことに手紙はくれるものの、誤字だらけだ。

1-3. 〈前後件に何らかのギャップ、後件にネガティブ感〉があるケース

A. 〈気持ちと現実／行動／判断とのギャップ〉、〈内面と外面のギャップ〉

(41) 頭ではわかっているものの、すぐ行動に移せない。(=(22))¹⁰

(42) 映画には行きたいものの、お金がない。(佐竹1984：例9)

(43) いけないと思うものの、ついつい甘いものを食べてしまう。(池上1997：例27)

(44) 彼は不愛想に生返事をしたものの、心ではかなり拘泥した。(志賀直哉

『暗夜行路』前篇第一2、岩波文庫 p.29、田辺2001：例6)

- (45) 会ってみたいものの、そうするのがいいのかどうか、迷いがある。
- (46) 深々と頭を下げていたものの、本気で反省している感じはなかった。

B. 〈「名」(またはその述べ方から含意されること)と実際のギャップ〉

- (47) 立秋とはいうものの、まだ残暑がきびしい。(=(27))¹¹
- (48) すぐできると宣伝しているものの、実際には一時間はかかる。
- (49) ロシア語を習ったとはいうものの、アルファベットをどうにか覚えた
だけだ。(倉持1971：856)

C. 〈時間的な状況と、進捗／すべきことのギャップ〉

- (50) 締切が迫っているものの、仕事はまだたくさん残っている／完成には
ほど遠い状況だ。
- (51) 時間がないものの、この仕事は今日中に終わらせなければならない。

A～Cを通じて、各例の後件には(一種の)〈不足感〉が感じられる。¹²

1－4. 後件のネガティブな内容を述べるのが主たる趣旨だが、前件で、それに対する〈割引き〉や〈留保〉に触れる場合

- (52) 大事にはならなかったものの、救急車が遅れるトラブルがあった。
- (53) 大事にはならなかった(からよかった)ものの、救急車があれ以上遅
れていたら危なかった。
- (54) 歩くのに支障はないものの、少し足をくじいてしまった。
- (55) からだ全体としてほぼ不自由はないものの、耳は遠くなってきた。

ここで述べたい主たる点は後件である(事柄の軽重という点からは前件が大きいにしても)。だが、ストレートにその後件だけを述べることは適当ではないという判断で、その後件の内容について〈この点は割引かなければならない〉とか〈この点、留保を加えなければならぬ〉ということを前件として付け加えていると見られるケースである。「ものの」には、先に § 2

の初めて見た〈非順当性〉や〈前後件の対照〉を表わす用法の他に、このように、主たる点である後件を述べるにあたり、前件で補足的に〈留保〉や〈割り引くべき点〉を一応述べ添えておく、といった用法がある。¹³

以上、「ものの」の文が自然な文になる1つの場合として、〈後件に不足感がある場合〉と括れるものを見てきた。ただし、後件に〈不足感〉(的なもの)があっても、「ものの」の文が成り立ちにくい場合もある。

(56) ?? このチームは大嫌いなものの、優勝してしまいました。

この文では、後件に不満感(一種の〈不足感〉といえよう)は見取れるが、前後件の組み合わせが、以上に見てきたどのタイプでもない。すなわち、〈前件から後件への展開の非順当性〉や〈前後件の対照〉が見られるわけではなく、前件は話し手の感情、後件はそれに反する事態の生起を述べたものである。こうしたケースは「ものの」になじまないのだと見られる。〈後件に不足感がある場合は「ものの」の文が成り立ちやすい〉ということは概ねいえることだと思われるが、その前提として、§2の初めて見たように〈前件から後件への展開の非順当性〉や〈前後件の対照〉を問題にした文で、ということがあるのではないかと見られる。

2. 前件に不足感(的なもの)がある場合

「ものの」の文が自然な文になるもう1つの場合として、

後件：主なこととして述べたいこと(〈不足感〉はない)

前件：後件に対する〈逆向き感〉のあること(後件に比べれば重要度は低く、主張を崩すまでのことではない)

とでも述べられるタイプがある。このタイプでは、後件はしばしば肯定的な気分で述べられる。前件は、後件のように事態が展開したり、後件のように話し手が主張したりする上で、その逆向きの比較的小さなファクターである。そうした要素があることに一応触れておくが、述べたい後件に比べれば大事なことなく、後件に比べてある種の(比較的小さな)〈不足感〉や、肯定的な気分への〈逆向き感〉が感じられる、というケースである。

前項 1 との対照のさせ方としては、後件が肯定的だという捉え方をすべきなのかとも思うが、ここでは、前件に〈不足感〉(的なもの)があるという捉え方をしてみたい。1 と似て、細かく見るといろいろな場合がある。

2-1. 前件が比較的小さな〈不足感〉(的なもの)を示すが、後件がそれを超えての、またはそれを認めた上での〈肯定感〉を示すケース

前件の〈不足感〉(的なもの)とは、「不十分／不完全／不(未)達成／不満足」感や〈肯定的に捉えたい後件への〉〈逆向き〉感など。後件の〈肯定感〉とは、その前件の〈不足感〉を超えての、またはそれを認めた上での、〈肯定感〉(「十分」感・「達成」感・「まあいいじゃないか」)感などである。例えば次のような場合がある。

A. 前件：マイナス要因、後件：それを超えてのよい結果

(57) 時間はかかったものの、俳優として大成した。

(58) 二浪したものの、第一志望の大学に合格できた。

(59) 費用はかかるものの、効果は絶大だ。

B. 前件：一時的に生じた〈逆向き〉のこと(初期や一時期の思わしくなかったことなど)、

後件：最終的によい結果

(60) 初めは連戦連敗だったものの、やがてめきめきと力をつけてきて、今や優勝候補の筆頭だ。

(61) 危い時期もあったものの、何とか持ちこたえて目的を達成した。

C. 前件：一部の局所的な／軽微なマイナス要因、

後件：そのマイナス要因は軽微だとして肯定的なことを述べ、全体としてはプラス／肯定感を示す¹⁴

(62) 救急車が遅れるトラブルがあったものの、大事にはならなかった。

(63) 少し足をくじいてしまったものの、歩くのに支障はない。

- (64) 耳はやや遠いものの、それ以外は全く不自由がない。(= (14))
- (65) 一部に反対意見もあったものの、賛成多数で可決された。
- (66) 調査方法にやや難はあるものの、結論は概ね支持できる。
- (67) 多少の不安材料はあるものの、無事行くのではないか。
- (68) 水はまだ冷たいものの、春がもうすぐそこに感じられる。(佐竹1984: 例4)

D. 前件：全体としては〈不足感／ネガティブ感〉がある

後件：ある程度達成された（または、少しだけいい）面

- (69) まだ安心とはいえないものの、香港での SARS の流行は少しずつおさまってきている。((28) の前後件を逆にした文)
- (70) 混雑は依然として続いているものの、ダイヤはほぼ平常通りに回復した。((29) の前後件を逆にした文)
- (71) 自分から進んで話そうとはしないものの、話しかければ答えはする。((30) の前後件を逆にした文)
- (72) (加齢で) 全身あちらこちら不自由なものの、耳だけはよく聴こえる。((31) の前後件を逆にした文)
- (73) 楽観はできないものの、いまは小康状態を保っている。((32) の前後件を逆にした文)
- (74) あの二人は時々ひどい罵り合いをするものの、殴り合いにはならない。((33) の前後件を逆にした文)
- (75) 左遷されたものの、クビにはならなかった。((34) の前後件を逆にした文)

後件は、十分な〈肯定感〉とまではいえない（場合もある）が、一応肯定的に捉えようとしている気持ちはあると読める。¹⁵

E. 前件と後件は別次元（別の観点）のことだが、前件：小さなマイナス、後件：それより大きなプラス面¹⁶

- (76) 人望は今一つなもの、能力は高い。((36) の前後件を逆にした文)

- (77) このあたりは交通は不便なものの、緑が豊かで自然には恵まれている。
(佐竹1984：例5、(37)の前後件を逆にした文)
- (78) 金はないものの、志は高い。((3)の前後件を逆にした文)
- (79) 給料は安いものの、職場の雰囲気はよい。
- (80) 仕事は忙しいものの、充実感がある毎日だ。
- (81) (17世紀にオランダ人がわずかな人数で台湾に進入したことについて)
かれらの所業が、今日の私どもアジア人からみれば“強盗”にちがいないものの、その勇氣にはおどろかされる。(司馬遼太郎『台湾紀行(街道をゆく40)』「海の城」朝日文庫 p.207、伊丹2000：例20)

F. 前件：〈不足感／消極性〉

後件：ともかく少しは何かをやった／やっている（少し肯定的なこと）

- (82) 行く当てはなかったものの、ともかく家を出てきた。((21)の前後件を逆にして少し改めたもの)
- (83) 最後は逃げられてしまったものの、一度はつかまえた。((23)の前後件を逆にして少し改めたもの)
- (84) ちっともうまくなならないものの、毎日練習はしている。
- (85) 権限はほとんどないものの、体裁のいい肩書だけはもらっている。((26)の前後件を逆にした文)
- (86) よくわからないものの、とにかく書いておいた。(池上1997：例28')
- (87) あまり興味はなかったものの、何かの役に立つかと思ってともかく申し込んでみた。

Fは、 $1 - 1$ 、 $1 - 1'$ の前後件を逆にした文にあたる¹⁷⁾。

2-2. 後件を肯定的に述べるのが主たる趣旨だが、前件で、それに対する〈割り引き〉や〈留保〉に触れる場合

- (88) 調査方法にやや難はあるものの、結論は概ね支持できる。(=(66))
- (89) 各氏の論は、細部では違いがあるものの、大筋では一致している。
- (90) 日取りまでは確定していないものの、年内の実施は決まっている。

- (91) 短期間の中断はあったものの、そのプロジェクトは10年も続いた。
- (92) 見つかった手榴弾のようなものは、(中略) 表面がさびてかなり古いものではあるものの、アメリカ軍の本物の手榴弾とわかりました。(NHKの放送、伊丹2000：例23)

述べたい主たる点は後件だが、ストレートにその後件だけを述べることは適当ではないという判断で、その後件の内容について〈ストレートな述べ方ができない点〉(〈この点は割り引かなければならない〉あるいは〈この点は留保や補足説明を加えなければ適正な伝え方にならない〉という点)を前件として一応付け加えるケースである。後件は〈大勢〉や〈話し手として話をそこへ持っていきたいこと〉で、話し手は後件に肯定的である¹⁸。前件は〈小異〉〈割り引くべきこと〉〈留保〉などである。前掲1-4と、後件がネガティブか肯定的(またはニュートラル)かという点は違うが、似ている。

なお、上で見た2-1の諸例にも、実はこうした性格が認められる(場合もある)が¹⁹、2-1の諸例は前件に〈不足感〉が感じられるので、2-1はそれに即してまとめた次第である。2-2の例の前件は、後件の方向を主張したい話し手からすれば、そのような主張をする上での一種の〈不足感〉ともいえようが、2-1の諸例に見られるような〈不足感〉とは((88)は別として)区別されるかと思う(2について、前件を「〈不足感〉(的なもの)」と記したのは、2-2のこうした性質を考えてのことである)。

ここまで、「ものの」の諸例を、1〈後件に不足感がある場合〉と、2〈前件に不足感(的なもの)がある場合〉とに分けて見てきた。両者を合わせて、〈前件か後件かのどちらかに、何らかの〈不足感〉がある場合〉とまとめられよう。あるいは、前件と後件に〈肯定感／十分感〉についての逆方向性がある場合、といってもよからう。

3. 単に〈前件から後件への展開の逆向き感〉を述べるだけで、〈不足感〉〈肯定感〉は読み取れない、ただし何らかの条件を満たしていると見られる場合
- だが、〈前後件どちらにも不足感が感じられない「ものの」の文〉もある

ので、以下、それらを見ていく。その共通点は、とりあえず、上記3の節タイトルのように捉えられるかと思う。「何らかの条件」と述べたものについては、以下に見ていく。

なお、以下の例の中には、文の許容度の判定が微妙で個人差のあるケースもかなりあると予想されたので、いくつかの文については（個人差のなさそうな文も含めて）許容度の調査を行った。調査を行った文については、文末に結果を示してある。 $[x-y-z]$ のように示す3つの数字 x 、 y 、 z が、それぞれ、○、△、×と回答した人数である²⁰。

3-1. 先行する時点での行為／状態と、〈逆向き〉の展開

(93) いったん仕事をやめたものの、すぐまた復帰した。(中里1997: 165)

[32-2-2]

(94) いったん就職したものの、すぐに退職した。[29-4-3]

(95) 彼女はショックを受けたものの、冷静に対応した。

(93) は2-1のBに近いともいえそうだが、後件を「いい結果」として述べているとも限らない。(94) も、前件が肯定的、後件が否定的な例だといえなくもないが、それはいささか強弁になろう。(95) も含めて、これら諸例では、前後件どちらかに〈不足感〉があるというより、〈前件から後件への展開の逆向き感〉を表しているだけの述べ方のように思われる。²¹

ただ、〈前件から後件への展開の逆向き感〉があればいつでも「ものの」が問題なく使えるかということ、そうともいえないようである。例えば次の3文では、○と回答した人は、それぞれ、25%、39%、53%であった。

(96) その交差点では右に行く予定だったものの、運転していた山田は左にハンドルを切った。[9-4-23]

(97) 朝、彼から「今日の会合は失礼することになりそうです」という連絡があったものの、結局やってきた。[14-10-12]

(98) 定期健診を受けたものの、何も異常はなかった。[19-8-9]

3-1のように、ただ〈前件から後件への展開の逆向き感〉を述べるだけで、〈不足感〉〈肯定感〉は特に読み取れない場合は、さらに、他の何らかの

要因を満たす場合に（強く言えば、そうした場合には限って）、自然な文になりやすい、ということなのではないかと見られる。

3-2. このタイプの許容度を高める要因(1)：〈キャンセル感〉の鮮明さなど

さらに精査が必要ではあるが、多少の観測を述べると、「前件と比べての後件への〈非順当感〉が大きいこと（単に〈逆向き〉というだけでなく）」や、「前件の事態に対して、後件で〈キャンセル感〉が鮮明に感じられること」、また「〈内面と外面のギャップ〉が捉えられていること」などが、このタイプの文の許容度を上げる（前二件については、〈非順当感〉が大きいほど、また〈キャンセル感〉が鮮明なほど、許容度が高い）のではないと思われる²²。

(93) (94) では〈非順当感〉も〈キャンセル感〉もはっきり感じられ、また (95) は〈内面 vs. 外面〉という要因をもつ。だが、(96) (97) では、逆向きではあっても、〈非順当感〉も〈キャンセル感〉も強くないのではないかと見られる²³。(98) は〈非順当感〉も〈キャンセル感〉も感じられない²⁴。

なお、〈キャンセル感〉の鮮明さということには、どう述べるかということも効いてくるかと見られる。次の2文を比べてみよう。

(99) ?? テレビをつけたものの、すぐ消した。[16-11-9]

(100) テレビをつけたものの、こんなことをしている場合ではないと思い直して、すぐ消した。[35-1-0]

2文の違いは、「こんなことをしている場合ではないと思い直して、」の部分の有無だけなのだが、この有無がこれほどまでに許容度に影響するとは興味深い。「こんなことを……思い直して」を付けることで、状況もよくわかり、〈キャンセル感〉が鮮明になるのだと、本稿としては見ておきたい。

前件が行為ではない例（実例）を1つ加えておく。

(101) 本人は医師ではないものの医療界のサラブレッドという血筋から、日医（引用者注：日本医師会）の政治団体「日本医師連盟」の推薦候補として当選を重ねてきた。（厚生労働大臣に就任した武見敬三氏について 2023.9.14 東京新聞 インターネットのニュース）

前件（医師ではないこと）は、後件（日医の推薦を受けること）にストレー

トにはつながらない要因であり、〈逆向き〉とまではいえまいが、前後件の間の〈非順当感〉が「ものの」を使わせたものであろう（強いていえば、前件に〈不足感〉を認めることもできるかもしれない）。前件は行為ではないが、このタイプの周辺的な例と位置づけられるかと思う。

3-3. このタイプの許容度を高める要因(2)：〈形勢・評価などの逆転〉

(102) 以前は、会ができれば、メンバー全員の名前と住所と電話番号を書いた名簿を作るのが当たり前だったものの、最近は個人情報を守るためにということで、そうした名簿作りはしないのが当たり前になってきた。[26-6-4]

(103) 一時期はステロイドの使用に否定的な医師が多かったものの、最近はいよいよ風向きが変わってきたようだ。[36-0-0]

これらも、3のタイトルの前半に該当する「単に〈前件から後件への展開の逆向き感〉を述べるだけで、〈不足感〉〈肯定感〉は特に読み取れない」ケースである。(102)も(103)も、前の時点とあとの時点のどちらかを肯定的に見て、もう一方を否定的に見ている、というわけではないように読める。だが、〈形勢・評価などの逆転〉を述べていることが、これらの「ものの」の文を成立しやすくしているのではないかと見られる。

先に、本節3のタイトルとして、「単に〈前件から後件への展開の逆向き感〉を述べるだけで〈不足感〉〈肯定感〉は読み取れない、ただし何らかの条件を満たしていると見られる場合」と述べ、ここまでのところではその「何らかの要因」として、「〈非順当感〉が大きいこと」「前件の事態に対して後件で〈キャンセル感〉が鮮明に感じられること」「〈内面と外面のギャップ〉が捉えられていること」を考えてきたが、もう1つ、「〈形勢・評価などの逆転〉を述べること」も加えられるのではないと思われる。

4. 全体の簡単なまとめ

本節 § 2 のまとめをしておこう（次節 § 3 は検証のような節なので、この § 2 の4が、簡単なまとめ、全体のまとめということになる）。

以上 § 2 では、「ものの」の諸例を、1・2・3に分けて見て来た。このうち、1は〈後件に不足感がある場合〉、2〈前件に不足感（的なもの）がある場合〉として、それぞれ括ることができるもので、1・2を合わせて、〈前後件のどちらかに不足感がある場合〉に「ものの」は使われやすい、といえるように思われる。1・2で見た文はすべてそのような文だったのだが、ここでは改めて次の4例を拾っておこう。

(104) 耳はやや遠いものの、それ以外は全く不自由がない。(= (14) (64))

(2 - 1 C)

(105) からだ全体としてほぼ不自由はないものの、耳は遠くなってきた。(=

(55)) (1 - 4)

(106) 耳だけはよく聴こえるものの、(加齢で) 全身あちらこちら不自由だ。

(= (31)) (1 - 2)

(107) (加齢で) 全身あちらこちら不自由なものの、耳だけはよく聴こえる。

(= (72)) (2 - 1 D)

4文とも〈前後件のどちらかに不足感がある〉ことが改めて確認できる。「ものの」の文の多くは (§ 2 の 1 か 2 に該当するものは) こうした性質をもつのだが、先にも述べた通り、先行研究はこの点に関心を払っていない。この性質があてはまらない「ものの」の例 (§ 2 の 3) も見られるので、この点への留意が行われなかったのはやむを得ないともいえるが、時にこの性質 (〈不足感〉) を欠く場合があるにしても、「ものの」がしばしば持つ、いわば基本的な「気分」のようなものとして、〈前後件どちらかに持つ不足感〉は留意してよいことなのではないかと、筆者には映る。²⁵ 日本語教育でも、「前後件どちらかに〈不足感〉のある場合は「ものの」を使いやすい」という趣旨の指導をするだけで、学習者をかなり益すると思われる。²⁶

一方、上に 3 としてあげた、〈前後件どちらかに不足感〉を欠いた場合でも「ものの」が使われるケースもあるが、このように〈不足感〉を欠いても「ものの」の文が成立するための条件は、それほど明白ではない。

簡単に観察したところでは、単に〈前件から後件への展開の逆向き感〉を述べるというだけではなく、「〈非順当感〉が大きいこと」、「前件の事態に対

して、後件で〈キャンセル感〉が鮮明に感じられること」、「〈内面と外面のギャップ〉が捉えられていること」、「〈形勢・評価などの逆転〉を述べること」といった「何らかの条件」(の1つ)を満たしていることが、許容度を高くするようであるが、許容度の判断に個人差がある場合もかなりあり、本稿ではこの〈前後件どちらかに不足感〉を欠く場合については、これ以上の深入りは見合わせておく。

§ 3 「ものの」の文が不自然になる例 — これまでの分析の検証 —

最後に、逆接の文ではあるが、「ものの」を使うと不自然になる場合をいくつかあげ、それがなぜ不自然なのかを、以上に行ってきた分析に基づいて、説明してみよう。こうすることで、これまでの分析の妥当性が裏付けられるであろう。以下はどれも、前掲 § 2 の3のタイプにはあてはまらないもので、「§ 2 の1か2で示したどれかのタイプに該当するか(=前後件のどちらかに〈不足感〉があるか)、それに該当しないか」ということが適否を分けるケースだと考えられる。個別に見ていこう。

(108) ?? 努力しなかったものの、成功した。[6-6-24]

この場合の「努力しなかった」は、それでも成功したのだから、否定的に捉えている(〈不足感〉を感じている)ケースではないと見るべきだろう。したがって、この文は、前件にも後件にも〈不足感〉が見えない。(108)が成り立ちにくいのは、そのためだと見られる。

(109) ?? 始めてからまだわずか3か月しか経っていないものの、すばらしい上達だ。[19-6-11]

「3か月しか経っていない」は、否定形だが、意味的にはネガティブ感のないケースで、前後件とも〈不足感〉のない文である。そのため許容度は低いと筆者自身は感じるが、調査結果では約半数が○とした。これは、前件の「3か月しか経っていない」が否定形であることが、見かけ上ネガティブ感をもたらし、この文の成立を助けているということなのかと推測される。ただし、○は半数をわずかに超えただけで、大多数が○とする文ではない。

(110) ?? 去年は海へ行ったものの、今年は山へ行った。(佐竹1984: 92) [3-

「ものの」が不自然な例として佐竹（1984）があげている文である（注25参照）。〈対照〉の例ではあるが、本稿の見方としては、前後件どちらにも〈不足感〉がないために不自然なのだと見られる。

(111) ?? 兄は勉強や読書が好きな学者肌であるものの、弟はスポーツ万能で弁論部というだいたい違うタイプだ。[10-8-18]

前後件ともに〈不足感〉がなく、筆者の感覚では違和感のある文だが、仮に、前後件の一方に〈不足感〉、他方に〈肯定感〉があれば、許容度が高くなるであろう。例えば、親が「子どもの職業として政治家が望ましい」と考えていて、子供たちのうち学者肌の兄には「政治家に向いていない」という〈不足感〉を感じている一方、頑健で弁も立つ弟には「政治家に向いている」という〈肯定感〉を持っている、というような場合には、上文は成り立ちうると見られる。調査の協力者諸氏がどのように考えたのかは不明だが（そこまでの回答を求めなかった）、○とした回答も28%あった。

(112) ?? あの店もおいしいものの、この店もおいしい。（中里1997：165）
[4-2-30]

以下の（112）－（116）〔（115）を除く〕の4文は、中里（1997）がよい文としてあげている文だが、本稿の筆者には違和感があり、調査でも×とする回答が多かった（各文に付した許容度の判断「??」は本稿のもの）。その理由を1文ずつ考えてみたい。まず、上記（112）の違和感は、前後件ともに〈不足感〉がないためと見られる。

(113) ?? あの店はおいしいものの、安い。（中里1997：164）[2-1-33]

（113）も、「安い」を肯定的に見ているとしたら、前後件どちらにも〈不足感〉がないため、不自然に映るのであろう。仮に「安い」を否定的に見ている（例えば「人を接待するにあたって、安い店では具合が悪い」というような）場合なら、ありうる文だと思われる。

(114) ?? おいしくないものの、まずくもない。（中里1997：163）[6-0-30]

前件に〈不足感〉はあるが、これに対して、後件は何らかの〈肯定感〉を鮮明に示す必要があるのだらうと思われる。例えば、次のような文（本稿の

作例) なら成り立つ。

(115) この店のクッキーは特においしくはないものの、かわいい形をしていて若い女性に人気がある。

先の (114) の後件「まずくもない」は〈肯定感〉が弱く、○が少なかったのはおそらくそのためであろう。「ものの」は、中途半端な物言いではなく、〈不足感〉と〈肯定感〉をはっきり対比して述べる場合に向くのだと見られる。

(116) ?? おいしい料理もあるものの、まずい料理もある。(中里1997: 164)
[9-10-17]

この文の不自然さを、次の文(本稿の作例)の自然さと比べてみよう。

(117) あの店は、肉はおいしいものの、魚はだめだ。

(117) のように具体性をもって〈肯定感〉と〈不足感〉が述べられていれば、だいぶ許容度が上がるが、(116) では、肯定的な内容についても否定的な内容についても、具体性がない。具体性なく「まずい料理もある」と述べるだけでは、〈不足感〉も弱くなり、そのための許容度の低さであろう。

次は、尾方(2001) があげている例である(尾方の判断は「*」)。

(118) ?? 時間がないものの、のんびりしている。(尾方2001: 例11)

「時間がない」には〈不足感〉があるとも見られるが、それにもかかわらず違和感があるのは、後件の「のんびりしている」に〈肯定感〉(§ 2 の 2 - 1 各文に見られたような) が認められないためであろう。例えば次例(本稿の作例) なら自然になる。

(119) 時間がないものの、それをよく克服してきた。

また、(118) は § 2 の 3 の〈前件から後件への逆向き感のある展開〉というケースにはあたるが、そこで述べた「何らかの条件」(〈キャンセル感〉など) が満たされていないため、3 のタイプの文としても成立しにくいのだと見られる。²⁷

次(本稿の作例) はそれほど明快な結果ではないが、一応示しておく。

(120) ?? 毎日ケーキを食べたものの、太らなかった。[16-7-13]

「太らなかった」に〈不足感〉(不達成感。太りたかったのに太らなかった

という気持ち)がある場合²⁸なら、自然な文だと思われる。逆に「太らなかった」を肯定的に捉えるほうがよくある捉え方だろうが、その場合は、前件に〈不足感〉が感じられないことから、あまり自然な文にはならないと考えられる。「太らなかった」に〈肯定感〉も〈不足感〉も移入させずに、ただ〈逆向きの展開〉を叙述するだけの場合は、〈キャンセル感〉がない。というように分析すれば、この文の判定は×に傾くかと思われたが、○の回答が44%と意外に多かったのは、「太らなかった」に不達成感を感じる読み方に目を向けた人が意外に多かったということか、〈キャンセル感〉が弱い場合の○×の個人差のためか、そもそも筆者の分析に問題があるということか、判然としない。

以上、「ものの」がなじまない例を、§2に示した本稿の見方によって具体的に分析してみた。

付. 「ものの」と「こそ」

逆接の「ものの」は、

(121) スタートこそ順調だったものの、途中から崩れ、最後はさんざんだった。(前掲(7)bの前件に「こそ」を加えた文)

のように、しばしば「こそ」とともに使われるので、最後に、これについて簡単に触れておきたい。

まず、逆接の文での「こそ」については、「こそ」の生起のしやすさが、使われる接続助詞によって違うことが、丹羽(2019:148)によって報告されている。その事例調査によると、逆接²⁹の「こそ」の用例全815例(現代日本語書き言葉均衡コーパス、2000～2009年)中、接続助詞(的なもの)は、「が」450例、「ものの」151例、已然形118例、「けれども／けれど／けど」48例、「已然形+ど／ども」12例、その他の合計36例(「ても」9例、「ながら」「とはいえ」各4例など)であったという。「ものの」と「こそ」の相性のよさは、本稿の筆者も(調査はしていなかったが)以前から感じていたところだが、それが裏付けられる調査結果であった。おそらく、「こそ」の文では、「が」「けれども／けれど／けど」と共起している場合でも、一般に「ものの」

への置き換えが可能なのではないと思われる。

だが、「ものの」の文（あるいは「が」「けれども」等の代わりに「ものの」が使える文）でも、「こそ」が使えるとは限らない。どのような場合に「こそ」が使えるのかを明らかにするという課題が生じることになるが、これについては、すでに丹羽（2019：149-150）が（「ものの」の文に限らず逆接の文における）「こそ」の使われ方について、的確と思われる答を示しているので、本稿はそれを紹介して、少し付け加えるにとどめる。

逆接の文の前件における「こそ」は〈価値的に小事でしかない〉場合に用いられると丹羽は捉え、次のような例をあげている（一部のみ引用する）。

- (122) 体育の授業こそ見学だったが、その他のことはなに不自由なく、角田は元気に小学校生活を過ごしていた。（山岸朋央「歌声で市役所を動かせ！「ハンディーズ」」『現代』2001年7月号、p.290、丹羽2019：例91）
- (123) 日差しこそ強いが、風が涼しく感じる中での練習。（神戸新聞2004.8.7朝刊、丹羽2019：例93）
- (124) 1番人気に支持されたエリザベス女王杯では、1着こそ逃したが2着とキッチリ結果を出している。（永野昌治『「1番人気→万馬券」の法則』東邦出版、丹羽2019：例97）
- (125) 晴明はへたり込みこそしなかったが、妙に力が抜けるのを感じた。（足立和葉『晴明ふしぎ草子』小学館（パレット文庫）、丹羽2019：例98）

(122) の「体育の授業」は「例外／小部分」で、「小学校生活」の中では〈小事〉である。(123) では、前件「日差しが強い」は後件の「例外／小部分」ではないが、前件は後件に比べ〈小事〉として評価されている。すなわち、「日差しが強い」と「風が涼しく感じる」を対比しながら、ここでは後者が重要で、練習環境がよいと感じられる中で「日差しが強い」というマイナス面はあるが大きなことではないと評価されている、というケースである。(124) (125) は、前件と後件が程度差を持つ場合で、これらでは高程度の側に「こそ」が用いられるが、「2着ときっちり結果を出す」中で「1着を逃した」ことは重視されず、「妙に力が抜ける」が成り立つ中、「へたり込む」ことは

極端なことから排除されている。つまり、これら各例いずれも、「こそ」を含む前件は、後件に対して〈小事〉として位置付けられているというのが丹羽の分析である。的確な指摘だと思われる。なお、上例ではすべて接続助詞「が」が用いられているが、いずれも「ものの」への置き換えが可能である³⁰。

本稿でこれまで見て来た「ものの」の文のうち、前件は重要でないと見られる例が種々あったが、これらでは確かに「こそ」を使えることが確認できる（一々の例についての検証は行わないが）。

本稿として付け加えたいのは、「こそ」は（逆接の「こそ」でない用法についても）しばしば〈強調〉の表現とされるが、これらの「こそ」は、前件の内容を〈強調〉しているのではない、ということである。前件は一応述べるが〈小事〉であって、重要なのは（主張したいのは）後件である、ということ〈強調〉するマーカーとして「こそ」は機能しているのだと見られる。主張したい後件に対して、留保すべき〈小事〉はそのことだけだといった気持ちで前件に一応触れ、その〈小事〉を構成するもの／ことの中でも特に端的に〈小事〉性を示す語句に「こそ」を付けるのだといえるかと思う。

注

- 1 古典語の「ものの」については扱わない。また、現代語でも「あの子たちは、喧嘩を始めても、ものの5分も経たないうちに仲直りする。」のような「ものの」（数詞の前に付く連体詞というべきか）は扱わない。
- 2 先行研究のうち、松下（2017）は、それ以前の研究と異なり、「ものの」の文の1つ前の文にも目を向けることで「ものの」に迫ろうとしたものである。当該の一文だけを見ていたのでは解決しないと見てのことであろう。動機は理解できるし、同論文が見出したとする「前文まで見ることで抽出できる特徴」もおそらく妥当かと見られるが、かなり複雑な内容であり、これを指摘しても、日本語学習者が「ものの」を適切に使えるようになることにはつながりにくい感がある。氏の努力を多とするに吝かではないが、一文前まで見ればすべて解決するというものでもないことを感じさせられる結果でもあった。
- 3 本稿は、日本語学習者にとってもわかりやすく、「ものの」を適切に使えるようになるための情報を提供する、という趣旨ももつものである。とりあえず当該の一文だけ

を見て（それでは不十分な面があることは承知の上で）、「ものの」を分析する。

なお、初めにあげた「のに」以下の諸語については、ここで詳しく扱ったり「ものの」と比較したりする余裕はないが、日本語学習を益するという趣旨からは、多少は触れておくべきかと思うので、以下にごく簡単に、これら各語についての筆者の見方を示しておく。

- ・「ながら」は、〈（普通の発想では）併存しがたいはずの事態が併存すること〉を述べる（「息子夫婦は隣に住んでいながら顔も見せない」）。同時並行の「ながら」（「コーヒを飲みながら新聞を読む」）の意味をとどめていると見られる。「ながら」は「意外性」のある場合に使われるという江田（1985：146,152）の指摘は、これ自体は支持できるかと思われるが、その「意外性」は〈普通は併存しがたいはずの事態の併存〉に根ざすものだと、本稿としては見たい。
- ・「といっても」は、〈前接語句（語・句・文）が普通にもつイメージと、後件で述べる実情とに乖離があること〉を述べる（「社長といっても、奥さんと二人だけの小さな会社を経営しているだけだ」「海外5か国で生活経験があるといっても、どの国も実は1週間ぐらいいしか行っていないんだ」）。前接する〈言葉〉を問題にした述べ方で、「といっても」の「いう」は「言う」意をとどめている。〔小金丸（1990：34,39）に、以上と同趣旨のことを捉えていると読める（ただし、いくつかの場合に分けて述べられているため、本稿の述べ方とはだいぶ違う述べ方になっている）記載がある。〕
- ・「のに」は、〈前後件の食い違い／ミスマッチ／矛盾をアピールする（こんなに「前件と合わない」ことが生じた！と訴える気持ちを表す）〉と見るのがよさそうに思う。「のに」については、「意味内容の衝突する（食い違う）事がらを、対比的・対照的につなぐ」（国立国語研究所1951：176）、「話者が食い違いを認識していること」を表わす（前田1995：105）、といった記述が以前から見られ、概ね当たっているともいえるが、単に対比・対照したり、認識を述べたりしているのではなく、〈こんなミスマッチが！〉というアピール性があることが特色だと見たい（この点、増田真理子氏（口頭でのコミュニケーション）に負う）。「のに」の種々の振る舞いは、ここから説ける点が多そうに思う。例えば、「のに」は、新聞報道や教科書・学術論文の記述などには一般に表われない（表われにくい）が、これも〈アピール性〉ゆえのことと見られよう。ちなみに「にもかかわらず」は「のに」に似ているが、使われる文体の違いとともに、「のに」に比べて〈アピール性〉が薄いという違いがあり、こちらは新聞報道・教科書・学術論文にも使われうる。

以上各語は、概略的な記述なら、上記のように比較的簡単に記せるのだが、「ものの」について見通しを得るには、以下のように相当な紙幅を費やさなければならず、それ

でもなお解決しきれていない点が残っている。

- 4 中里（1997：166）は、（1）をあげ、「ものの」が「命令・依頼などの働きかけ」の後件となじまないとしつつ、

（i）むだだとわかっているものの、それで納得するのなら、挑戦しなさい。
のように前後件の間につなぎの語句があれば不自然さが減ると注記している。

なお、中里は

（ii）むだだとわかっているものの、挑戦したい。
という文が許容できるという例をあげ、「ものの」と「意思・希望」との組み合わせは可としている。だが、「希望」の場合は（一種の叙述なので）許容しやすいように本稿の筆者も思うが、意志の表示との組み合わせは不自然になりやすいように思われる。

- 5 なお、新聞報道で「ものの」が全く使われないということではない。作例ではあるが、「投票日は悪天候だったものの、有権者の関心は高く、投票率は80%にのぼった。」のような文なら新聞でもありうるだろう。（10）は、中立的な報道を標榜する新聞記事にはなじまないのではないか、ということである。

- 6 〈非順当性〉〈対照性〉という語で逆接を捉えようとする見方は、尾方（2001：23）に見られる。

- 7 先行研究には、「ものの」の後件について、「それ（前件）から予測される順当な帰結とは反する、あるいは、それとは相容れない事柄が存在・成立する」（倉持1971：855）、「それ（前件）とは相反する、また対応しない事柄が展開する」（佐竹1984：92）などの記述がある。

- 8 「ものの」の用法をこのように厳然と細分すべきだと主張するものではなく、比較的似ているものどうしまとめてみようという程度の趣旨である。以下においても同様。

- 9 「ものの」の用法に、〈前後件の程度差の対立〉をなすタイプがあることは、丹羽（1998：118-119）に指摘がある。

- 10 この例は1-1でも掲げた。この項（1-3-A）の一部は、1-1とも見られる。

- 11 この例は1-1'でも掲げた。なお、この項（1-3-B）は、「ものの」を「といても」（注3参照）と言い換えることもできるケースである。

- 12 （51）の後件は、狭義の〈不足感〉ではないが、「困った状況だ」というケース。

- 13 1-2の例も、次のように（再掲）、本項1-4とも見られる面のあるものもある。

（33）あの二人は、殴り合いにはならないものの、時々ひどい罵り合いをする。

（35）通過はしたものの、与党内からさえ反対票が出た。

後掲の2-2も、前件が補足的に〈留保〉等を述べるケースである。「ものの」の用法を整理している先行研究中、佐竹（1984：92）と尾方（2001：8）には〈留保〉

という語が見える。中里（1996：103）が〈補足〉と呼ぶ用法の例文も、〈留保〉や〈割り引くべき点〉を補足的に述べ添えておくケース（と本稿が今述べたもの）にほぼ相当するようである。

- 14 1－4の前後件を逆にしたタイプにあたる。

- 15 1－2の前後件を逆にしたタイプにあたる。

- 16 1－2'の前後件を逆にしたタイプにあたる。

- 17 1－1の前後件を逆にして「ものの」でつなぐと不自然になる場合も多い。例えば、

（16）大物俳優を大勢起用したものの、視聴率はささんだった。（再掲）

（20）買ったものの、ほとんど役に立っていない。（再掲）

の前後件を逆にして「ものの」でつないだ文を作ると不自然である。これは、時間が逆向きになるためであろうが、（82）（83）はぎりぎり可かと思われる。また、

（iii）毎日練習しているものの、ちっともうまくなならない。（中里1996：96）

は「同時」的だからか、前後件を逆にした（84）も成り立つ。

- 18 肯定的・否定的ということを問題にしていない、いわばニュートラルな場合も見られる（例（92））。

- 19 （88）（＝（66））は、2－1－Cでもあげた例である。

- 20 文脈や状況は示さずに当該の一文だけを示し、「問題なく言える」→○、「文として違和感」→×、「○と×の間（または、○か×か迷う）」→△と記入してもらった。協力者は、2023年度の筆者の授業を受けた國學院大學学生（ほとんどが学部3・4年生）36名である。

- 21 中里（1997：165）は、（93）について「前件から予想される順当な展開とは異なる方向に進んだことを示している」としている（（94）（95）は本稿のものだが、同じように見られるかと思う）。なお、中里は「意外感を伴わずに」とも付け加えているが、意外感は伴っても伴わなくてもよいのではないかと見られる。

- 22 これらをすべて満たす必要はなく、どれか一つでよさそうである。

- 23 （97）を次のように変えたと、許容度が高くなる。

（iv）朝、「今日の会合は失礼することになりそうです」という連絡を入れたものの、結局は参加できることになった。[27-63]

こちらは自分の行動のキャンセルで、〈キャンセル感〉が強いのであろう。

- 24 これに対し、次の文の許容度は高い。

（v）念のためチェックしてみたものの、何も異常はなかった。[30-3-3]

これは、何か異常が想定される文脈（例えば「誤って薬を多く服用してしまった」「爆発物をしかけたという電話があった」などという文脈）で使われている文で、前件は、それを受けて、念のためチェックしたというわけである（何も異常がない場合にも受

- ける (98) の定期健診とは、この点違う)。後件は、「何か異常がありうる」という当初の想定との (またその想定に即してチェックをしたという前件との) 乖離のある (= ある意味で「順当」でない) 結果であり、この〈非順当感〉が、後件に〈不足感〉がなくても「ものの」を許容しているのかと思われる。
- 25 逆接の文なのだから、前後件どちらかに〈不足感〉が出やすいのは当然に近いのではないかという見方もありうると思うが、「が」「けれども」では、前後件どちらにも〈不足感〉のない例もよく見られる。一例をあげる。
- (vi) 去年は海へ行った [が/けれども]、今年は山へ行った。(佐竹1984: 92)
- この例では「ものの」はなじまない (後述)。
- 26 なお、冒頭で「先行研究は隔靴搔痒」と述べたが、先行研究の中で、わずかに池上 (1997: 25) が、「ものの」の特徴を「前件の内容をプラス (マイナス) の評価を表すものとしてとらえ、それに対する後件の内容を反対にマイナス (プラス) の評価でとらえること」としているのは、あるタイプの「ものの」については、よい着眼だといえる。この主張は、前後件どちらかにマイナス感があるということにもなるので、本稿の見方にも通じる。ただし、本稿 § 2 の 1・2 の範囲についてであっても、プラスが常にあると見るのはあたらない (例えば、前掲 1-1、1-1'、1-3 のような諸例では、後件はマイナスであっても、前件はプラスではない)。その意味で、本稿のように「どちらかに〈不足感 (マイナス感)〉」と述べるほうが、無理がない。また、§ 2 の 3 のようなケースでは、池上の主張はしばしば成り立たない (これは本稿も同じであるが)。
- 27 (118) についての以上の見方は、本稿のものである (尾方は別の説明を与えている)。
- 28 例えば力士は体格をよくすることが大切で、太るために一生懸命食えるという。
- 29 丹羽は「逆接」の名は用いず、「対比「こそ」」としている。
- 30 (122) - (124) は、本稿 § 2 の 2-1 のタイプ (前件に〈不足感〉、後件に〈肯定感〉があるもの)、(125) は 1-2 のタイプである。

参考文献

- 池上素子 (1997) 「「のに」・「ながら」・「ものの」・「けれども」の使い分けについて」『北海道大学 留学生センター紀要』 1、pp.18-37.
- 伊丹千恵 (2000) 「「ものの」の意味と用法について」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』 26、pp.231-240.
- 尾方理恵 (2001) 「「ものの」の意味と用法」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』 27、pp.1-15.
- 倉持保男 (1971) 「ものの」松村明編『日本文法大辞典』明治書院、pp.855-856.

- 江田すみれ（1985）「逆接の「ながら」の意味と用法について」『ILT NEWS』78、早稲田大学語学教育研究所、pp.141-157.
- 小金丸（現姓 野田）春美（1990）「相手の推論を否定する形式をめぐる——「～といっても」と「～からといって」——」『梅花短大国語国文』3、pp.25-41.
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』（国立国語研究所報告3）秀英出版。
- 佐竹久仁子（1984）「～もので／～ものの／～ものを」『日本語学』3巻10号（10月号）、明治書院、pp.89-96.
- 田辺和子（2001）「接続助詞「ものの」の文法化に伴う譲歩的意味の創出について」『日本女子大学紀要 文学部』50、pp.101-114.
- 田辺和子（2005）「接続助詞「ものの」における「文法化」と「語用化」」『目白国文』44、日本女子大学国語国文学会、pp. 左54-67.
- 中里理子（1996）「「ものの」の意味・用法について」『東京大学 留学生センター紀要』6、pp.95-109.
- 中里理子（1997）「逆接確定条件の接続助詞—ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラについて—」『言語文化と日本語教育』13、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.160-170.
- 丹羽哲也（1998）「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究』50巻 第10分冊、大阪市立大学文学部、pp.91-125.
- 丹羽哲也（2019）「逆接の接続助詞「が」「にもかかわらず」と対比を表す助詞「は」「こそ」」『人文研究』70、大阪市立大学大学院文学研究科、pp.133-155.
- 前田直子（1995）「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学 留学生センター紀要』5、pp.99-123.
- 松下光宏（2017）「文・節の連接からみた接続辞「ものの」の使用文脈の特徴」『日本語教育』166、pp.31-46.

